

[駒沢女子大学 研究紀要 第5号 p.27 ~34 1998]

挿絵画家ルートヴィヒ・リヒターの誕生 — 自伝『あるドイツ人画家の回想』からの抄訳 —

糟谷 恵次

„Wie ich zum Holzschnitt oder wie dieser zu mir kam.“
Aus Ludwig Richters „*Lebenserinnerungen eines deutschen Malers*“

Keiji KASUYA

ドイツ後期ロマン主義美術を代表する画家ルートヴィヒ・リヒター (Adrian Ludwig Richter, 1803-1884) は、その未完の自伝『あるドイツ人画家の回想 *Lebenserinnerungen eines deutschen Malers*』においてみずから「風景画家」と称したとおり、画家としての出発点を風景画のジャンルに見いだした。青年時代、数年にわたるイタリア留学を経験したリヒターは、コッホやナザレ派の影響を受けつつも、繊細で詩的な独自のロマン派的世界を構築したことで世に受け入れられることになる。しかしリヒターの芸術がそれ以上に広範な層に影響力を及ぼしたのは、3000点にも及ぶ挿絵制作の分野であったことも周知の事実である。アードルフ・メンツェルの挿絵で有名な『フリードリヒ大王伝』の著者である美術史家フランツ・クーグラールの言葉どおり、リヒターは「書物の芸術的な意匠によって大衆的影響を及ぼしたドイツにおけるこの分野の真の代表」であった。

ここに抄訳を試みた箇所は、上述のリヒターの自伝『あるドイツ人画家の回想』の最終章にあたる。自伝の執筆は、息子ハインリヒの勧めにより、画家66歳にあたる1869年に開始され、残念ながら未完に終わった。本人の死後、ハインリヒの手によって若干の補筆・変更をほどこされて刊行された『回想』には、それゆえ全体としてのまとまりや話の流れの点で不備を感じさせる箇所もいくらか認められる。にもかかわらず、『回想』は、リヒターのみならず当時の芸術家たちの実態を知るうえで欠くことのできない貴重な資料となっている。以下に訳出した最終章の記述もリヒターの芸術的發展における大きな節目となる時期 (画家33歳~44歳) を理解する上できわめて重要であり、多くの興味深い問題を内包している。

「ドレスデン 1836年~1847年」

エーメ夫妻の提案で、私たち家族は同じ時期にレープタウ地区の手前にある新築の家に引き移った。私たちが二階に、エーメ一家が三階に移り住んだ。

男たちと同様、たがいに親しかった妻たちは、都会から離れた、なかば田舎風のこの共同生活を満喫した。子供たちの関係も年齢、人数、性別の点で似たようなものがあった。なぜなら、すでに述べた三人の子供たちに加えてさらにもう一人、第四子のヘレーネが生まれていたからだ。ヘレーネの代母役をつとめてくれたのは、わが家と親交があり敬愛的であったキューゲルゲンの母上であった。エーメと私がこのように身近に暮らしたことで、私たちの仕事における相互の関心と芸術上のやりとりは高まるばかりであった。一方が自分の絵に疑問の箇所を生じると、ただちに他方の住人が呼ばれてその事柄が協議され、時には解決をみた。

夏になると私たちは、スケッチブックをカバンに入れ、すぐ近くのプラウエンの谷へと二人して散策にでかけた。そこは当時とても画趣に富んだ魅力的な場所であった。またその丘に登ることもあった。そのよう

なときはいつもスケッチブックにささやかな獲物を携えて帰宅したものである。

仕事の仕方には著しい相違があるように思われた。私は多くの事柄に関して昼間に精を出す方であった。仕事を片づけ終えてしまうと、すぐにそのことは頭の中から消えた。それまで一生懸命に励んでいた仕事と同じように、それ以外の事柄も私にはたいへん重要なものと思われた。エーメの場合はまったく異なっていた。彼においてはすべてが気分次第であった。というのも、絵の制作中に意のままにならない箇所が生じたりすれば、それはずっと彼を悩ませ、彼の頭から離れなかったからだ。その結果そのようなときには、仮に絵筆やパレットを片づけてしまっても、きまって散漫な、心ここにあらずといった具合になり、夫人もたいへん困惑していた。食事をしては何を食べているのか分からず、聞いてはいても話しかけられている内容が分からなかった。それどころか、ひどいときには夜も落ち着いて眠ってはいられなかった。ベッドから起きあがると、ランプを灯してアトリへに向かい、そこで問題の疑念の箇所を凝視するや、絵筆と絵の具に手を伸ばし、自分が正しいと思うまで、あるいは——たいていはそうなったのだが——塗りたくってとことんダメにしてしまうまで、長いあいだ描き続け、問題の箇所をすっかり消し去ってしまうと、ようやく安堵するのであった。エーメの場合は何事も気分から生じ、私の場合は何事も内省から生じた。

この頃私はかなり大きな絵に着手した。それは、私のもとに訪れたフォン・シュヴァイツ男爵が注文したものであった。ベーメンのマリーアシャインで見つけたモチーフは、鉛筆による素描で描かれてあった。菩提樹の古木に取り囲まれて、泉と聖人像のある日陰の場所から、真昼の太陽に照らされた穀物畑が眺められた。小さな羊の群と羊飼いを添えてこの風景を生き生きとしたものにし、泉の水飲み桶のまわりに、水を飲みながら休息する巡礼者の一団を集わせることを思いつくのは容易であった。日陰の涼やかな場所から真昼の熱気へと視点が移動することで絵画的効果が生じ、添景の配置が詩的な印象を与えた。この絵は芸術展に出品され喜ばれた。

これは私が受けたわずかな注文のひとつであった。たいてい私もエーメも依然として美術協会に期待をかけざるをえなかった。しかしそれも失敗に終わった。すなわち絵は購入してもらえなかったのだ。その結果、家計は大いなる難局をむかえ、ふたたびいっさいが元通りになるまでには長い時を要した。

家長であった私たち兩人が、完成した自作の絵を同時期に出品し、緊張した期待の中、数週間にわたって決定を待っていたことは、悲劇的とも喜劇的ともいえる。それは、どのような仕事にもつきものの、不快な、時として苦悩に満ちた日々であった。

芸術協会の委員会が絵の購入に決定を下す日がついに近づき、結果の知らせが私たちのもとまで届くと、心配の重い石は、心から落ちるか、あるいは倍の重みで心にのしかかった。ところでしかし、私は自分の作品を美術協会の取引場に提出するように指示されていたので、それからはいつでも絵をその市場に売ることができるのはとにかく幸運に思えた。だが、絵の売却が、変動する偶然の多数票の如何に依ったことは私のやる気を失わせ、また売れたとしてもその絵が、相対的な金銭価値を評価した買い手に、おそらく欲しくもないのに、偶然——抽選で——買い取られるといったことが、私の感動を萎えさせた。それどころか、協会はしばしば後援会の性格を帯びたため、それが私の目には不正で不健全な関係に映った。それゆえ後日、G・ヴィーガントを通じてはじめて、たとえそれがささやかなものであれ、彼が心から望み必要とする作品の完成の依頼を受け、そして彼が、受け取ったそれらの作品に喜ばしい関心を示しながら礼を述べ支払いをしたとき、私にはそのようなやりとりこそ自然かつ健全な関係があるように思われた。相手側は本心で仕事をしてほしいと望み、その仕事ぶりに満足をおぼえ、感謝の意をこめて報酬を与える。一方、私は、快く引き受けたその課題に没頭し、それを巧みに手際よく仕上げる。——告白するが、これによって私はただちに、以前よりもはるかにさわやかな心持ちになった。以前にくらべはるかに自由に呼吸し、もはや私情やむら気な偶然に左右されない自分を感じた。

しかし、この時期を語るにあたり、いくらか筆が先走ってしまったようだ。エーメと共に暮らした最初の数年に戻ることにしよう。

マイセン素描学校の廃止は、それまで続いていた美術アカデミーの変革を禁止することに等しかった。フ

オン・アインズィーデルの退陣後に入省したフォン・リンデナウ大臣は、芸術アカデミーが時代遅れの要素をあまりにも多く内包していること、またそれらが新しい考えを阻みながら対立し、それによって必然的にその活動が弱められていることをすぐさま見抜いた。大臣はフォン・クヴァント氏と親交があり、エルベ河畔の美しい場所にある氏の家に住んでいたこともあって、現状にもっとも詳しいフォン・クヴァント氏とその件に関して詳細に話し合うことができたのであった。

美術アカデミー。風景画の授業を引き受けた際、私が最初に行ったのは、信じられないほど古くさく型にはまったやり方を、居合わせた生徒たちから消し去ることであった。すなわち、ありとあらゆる自然な形を損ねてしまう、いわゆるツィング流の手法を排除することであった。それは決して容易なことではなかった。とくに私がしなければならなかったことは、模写のための手本をすべて片づけ、他の素材を調達することであった。しかし、すぐれた近代風景画家の有益な習作を入手することは容易いことではなかったし、また高価すぎたため、ヴァーゲンバウアーのリトグラフの冊子を購入したり、他のその種のもので満足しなければならず、当座はほとんど自分自身の作品を利用して与えた。そんな風にしてアカデミーの冬学期は模写に明け暮れて過ぎた。しかし、夏が近づき、戸外で一面に葉が茂り花が咲く時期になると、私はある試みを敢行する決断をくだした。それまでアカデミーにはそのような慣習はなかったが、生徒たちに直に写生をさせたのである。夏の半期には、参加する生徒は風景画に熱心な者たちだけで、数は八人から十二人を越えることがなかったため、実行は容易であった。この授業は大いに成果をおさめ関心を惹き起こしたので、今日(1881年)までずっと行われている。模写と写生を交互に行うことが、生徒の間にそれまで以上の新鮮さと活気をもたらした。生徒は、絵を描くに際し、野外では対象の選択とその取り扱いに今まで以上の自主性を必要とし、自分の欠点を自覚することになった。それによって、彼らが次の冬学期には以前よりも深い理解と生き生きとした関心をもって原画を模写するという利点が生じた。

私は今、ふたたびあの小さな出来事のひとつを思い出す。その結果は重大なものであり、その後の私の人生に転機を与えることになった。それを言葉で言い表し、回想録のこの章に表題として付すならば、「私がいかにして木版画に至ったか、あるいは木版画がいかにして私のもとにやってきたか」とでもなろうか。この件に関しても善良なパパ・アルノルトが一役買っていた。そして、私の人生と創作の転機を生んだのはまたしても誤解であった。

ある日のこと、いつになく不機嫌な顔で私のもとを訪れたアルノルトは、私がゲオルク・ヴィーガントというライブツィヒの出版業者にたいして、彼の出版社のザクセン＝スイス全景図の何点かを複製するの同意を与えたか否か、私に釈明を求めた。私は当の出版者も知らなければ、問題の作品も知らなかった。しかし、海賊版によって以前に何度かひどい損害を受けたことのあるパパ・アルノルトが自分の権利を侵害されてひどく不快な思いをしているにちがいないということだけは十分に理解した。

私は自分がこの件に関与していないことを容易に彼に説明することができたので、私たちはなごやかに別れた。その後アルノルトが訴訟を起こす構えを見せたため、ヴィーガントがドレスデンにやって来て、両者は和解した。その折り、ヴィーガントは私のもとを訪ねた。当時まだ芸術にも芸術家にもまったく詳しくなかった彼は、私がドレスデン在住の身であることをアルノルトを通じてはじめて聞き知ったのであった。ヴィーガントが私に話したところによれば、アルノルトとの係争において問題になったのは、彼が刊行準備をしている版画集『絵画的・ロマン的ドイツ』のために『ザクセン＝スイス風景画集』の数葉を利用するか否かということであった。さらにヴィーガントの言によれば、私が彫版した何枚かをロンドンに送り、当地で銅版画用にもっと効果的な技法で翻刻させたが、そのために痛い目にあったという。最後に彼は私に、『ザクセン＝スイス』のセクションのまだ不足している風景画の何枚かを新たに写生して仕上げる意志はないかと訊ねた。ところで私はローマですでに、将来いつの日か『ドイツ三河川——ライン、ドナウ、エルベ』なるエッチング集を制作したいというアイデアを持っていた。その作品集では、景観ばかりでなく歴史的に注目し得る地域、都市、城館、修道院などを民族衣装、祭礼、風習と結びつけてひとつの詩的な全体像にまとめあげる予定であった。昔からあたたためてきたお気に入りのアイディアが話の途中で話題にのぼると、感激

した彼は、それこそが、ほんやりとではあるが、自分の頭に浮かんでいたものだと大声で叫び、作品の数部門を引き受けるようにと私に依頼した。「ハールツ」、「フランケン」、「リーゼンゲビルゲ」のセクションを担当することで私たちの意見は一致し、このようにして私はゲオルク・ヴィーガントとはじめて仕事の関係を結ぶにいたった。そして『絵画的・ロマン的ドイツ』のために引き受けた下絵は、その後の私の木版作品への架け橋となった。そうしたドイツ景勝地への旅は大部分が徒歩でおこなわれ、ドイツの民衆生活からのさまざまな形象や体験の収穫がスケッチブックや記憶に残された。それらの形象や体験は、後の私の創作に大いに役立つことになった。

当時かなりの健脚であった私は、たとえばフランケンの旅行では、そこを何度も縦横に、ニュルンベルクからレーンまで旅してまわったが、およそ百ポスト・マイルを二週間以内で歩き通した。

『絵画的・ロマン的ドイツ』の刊行直後、ヴィーガントはゴールドスミス作『ウェイクフィールドの田舎牧師』の木版挿絵入りドイツ語版を企画し、その制作を私に委任した。

当時私は木版画の技法に関してまだわずかな知識しか持ち合わせていなかった。わずかに覚えていたのは、シュタインラ教授がかつて私に小さなスケッチを版木に描かせ、エングレーヴィングとの対比で木版の原理を次のように説明しようとしたことだけである。すなわち、版木を印刷すると紙面は黒くなり、それに反して、研磨された銅版板を印刷しても紙は白いままである。エングレーヴィングの場合、暗部はしっかりと刻み込まれるのに対し、木版の場合、深く彫られるのは明るい部分である。芸術家はしたがって、版木固有の黒色を優先的に使い、描画に際しては暗部から明部へと作業しなければならない。その他に私が知っていたのは、最近の技法が以前のものとは本質的に異なるということであった。デューラーの時代には、長尺の梨材から取られた版木に下絵が写され彫刻刀で彫られたが、今では、ビュランでの作業が容易な柘植の心材の版木にスケッチされるのである。彫刻刀での彫りは昨今のビュランでの作業ほどには繊細で込み入ったタッチを生み出すことができなかった。昔の人々はそれゆえに下絵を簡素に、荒いタッチにとどめなければならなかったものであり、平行線交叉法は仕上げの難しきゆえに應用されることはきわめて稀であった。ところで私は、旧来の線描法の簡素さをできるだけ保持し、とりわけ明部と暗部を際立たせることに努めた。したがって階調による造形があまりにも広範囲に及ぶことは避けた。なぜならそれは木版画に濁った感じを与えやすいからである。もっぱら私が努めたことは、木版画の性格、すなわち素材によって制約を受けたその様式を守り、先人たちの模倣にも銅版画との競争にもこれを乱用したり誤用したりしないということであった。後日さまざまな論評において、私の木版画がまるで日の光のようなものを放っていると強調されたが、その賞賛はすべてが私の創意によるのではなく、上に述べてきた方法のおかげである。

一般に私が目指したのは、絵画の階調効果のたぐいではなく、モチーフの豊かさ、明快な構図、線描の美しさであった。

ガラス彩色画と同様に数世紀にわたり忘却のかなたに沈んだ熟練技術のひとつであった木版画は、ロンドンにおいてその復活を遂げていた。前世紀の終わり頃、木版画はかの地で銅版画の彫版師ビューイックによってはじめてふたたび用いられたのであった。

以来イギリスでは木版師の一派が育成され、書籍出版業に豊富な仕事口をうみだした。そんな彼らに注目していたゲオルク・ヴィーガントは、有能な木版師数名をライブツィヒに呼び寄せていた。彼らのうちニコルス、ペンワース、アランソンの名前だけを挙げておこう。私は今や『ウェイクフィールドの田舎牧師』の制作にすすんで取りかかり、みずから版木にスケッチした。しかし作業が進むにつれ、予感していなかった悩みも生じた。というのも、その他の点では綺麗に仕上げられた木版画のいくつかを見て、私の額にわずかながら冷や汗が流れ落ちたからである。ふさわしい表現を見出そうと、しばしば二度三度と描き変えていた頭部の描写が特に著しく変更されており、私にはひどく異様に映った。私にとって人物描写こそ心にかかる大切な事柄であったのに対し、かのイギリス人たちは自分たちの誇りを、彫版を巧みにこなすことと階調効果に置いていたのであった。

『田舎牧師』の木版画というこの処女作以上に、素材の点でも私の心をさらに惹きつけたのは、ドイツ民

衆本のための次なる木版画の仕事であった。それらの民衆本は、好みのロマン主義の領域に私をいざない、すでにマイデルを通じて周知の、お気に入りのものであった。風景画家であった私は、それゆえこの挿絵の仕事に、いわば立入禁止区域に陥ったような、ひどく不安な思いを感じた。またひそかに行われたこれらの副業が芸術サークルの間ではほとんど注目されず、手ひどい批評を受けはしまいかと畏れもした。それだけに、『田舎牧師』の刊行後まもなく、シュテルンベルクの『上流社会新聞』に好意的な書評を目にしたときには、たいへん快い驚きを覚えた。ちなみにこの新聞は、これらの多くの挿絵にとっても熱のこもった詩的解釈をほどこしていた。

民衆本の挿絵も、賞賛と激励にあふれる同様の注目を浴びた。たとえばユリウス・ヒュープナー教授は、『メルジネ』の挿絵の中の「湯浴みするメルジネ」の場面を見て、同一のモチーフに関する構成と解釈に著しい一致を認め、驚くと同時に嬉しくもあったと述べた。また、チュービンゲン大学のある学生が語ったところによれば、高名な美学者フィッシャーは数ある講義のひとつにおいて、最近出版された民衆本の匿名の挿絵を賞賛をもって指摘し、そしてそれを熱心に薦めた、とのことであった。

まだ『田舎牧師』の仕事に取りかかっている最中、新しい舞台幕の製作を依頼されたヒュープナーから、その共同作業を要請された。彼はすでにデュッセルドルフで、ティークの『オクタヴィアン』のプロローグからの一場面を製作していた。その図案を彼は今度は舞台幕の中央の絵として用い、それを豪華な懸花装飾と劇的寓意画で取り囲み、悲喜劇の主要人物をアラベスク模様によって飾られたフリーズで下部をまとめあげた。中央の絵はヒュープナーみずから描いた。エーメがバックの風景を引き受けていたため、私にはフリーズの半分、フォン・エールとメッツには喜劇の部分が割り当てられていた。私は最初この依頼に抵抗した。なぜならそれほど大きな人物像を描いたことなどいまだ一度もなかったからである。しかしヒュープナーは私を離してはくれなかった。それゆえ結局、私はそのフリーズの構成をおこなうことになった。そこに描いた人物群や個々の登場人物は、ハムレット、リア王、ロミオとジュリエット、ユスティーナ、奇跡を行うマーズ、誠実な王子、ゲッツ、ファウスト、エグモント、ヴァレンシュタイン、オルレアン乙女、そしてテルである。この共同作業に私は十分な満足をおぼえた。この舞台幕は後日ドレスデンの観衆にたいへんな好評を博し、観衆は連夜のごとくその豪華さに驚きの声をあげ、おびただしく描かれた有名な詩歌の登場人物たちを見ては楽しんだ。奇妙なことに、劇場を訪れた者たちの間で、中央の絵の主人公ロマンツェが人気女性歌手シュレーダー・デフリエントの肖像画とうりふたつだという噂が流れた。

舞台幕の仕事を終えると、私の資質にとっても似合いの新たな依頼がヴィーガントのもとから舞い込んできた。「学生歌・狩猟歌・民謡」のシリーズを挿絵と楽譜付きの廉価版で庶民に販売するという話であった。挿絵のスペースはとても限られたものではあったが、想像力を掻き立てるそれらの素材はありとあらゆる形姿や奇想を描くには十分な場所を提供してくれた。図案は私の手からまるで飛び出すように生まれ、愉快な作品が出来上がった。

ここでもうひとつ、これに先がけておこなわれた仕事を思い起こしておかなければならない。すなわち、1842年ゲオルク・ヴィーガント社から刊行された挿絵入り『ムゼーウス童話集』の美術部門への参加である。

これらの挿絵を描きはじめた頃、私は親愛なる老従兄弟のことを思い出した。本の入った箱を手にした彼が、少年時代の記憶の中からまるで夢のように甦り、ムゼーウスの三巻本を私に差し出した。何年も前のこと私は、日の長い夏の夕べ、開け放たれた窓際に腰を下ろし、町の濠の上でツバメたちが囀るのを耳にしながらかこのムゼーウスの宝物を読み耽っていた。そのとき思い浮かんだ図案がふたたび現れ出てきたのだ。今はそれを鉛筆で紙に写しさえすればよかった。そのような創作に私は嬉しさを感じはしたが、ヨルダンやシュレーダーといった『ムゼーウス』の有名な共同執筆者たちの名を思い返すと、大いなる不安を感じた。以前から私は、広い世間の市場へ実名で出ることには物怖じしていたからであった。自分の名前がタイトルに挙げられた挿絵の仕事が世に出る前には、毎回ある種の緊張感に襲われた。それはまるで、多くの役者が、それも大物の熟練した役者でさえ、舞台にあがる前にはいつも感じるような緊張感であった。ひっそりと匿名作品を出すという考えはすでに若い頃に頭に浮かんでいた。匿名なら、自分の絵がどれほど人々

を喜ばせるのかをうまい具合に観察できるように思われたのである。創作を可能にするためには、外界や読者が自分からまったく消え去っている必要があった。また、自分と自分の絵の世界の中で完全に生きるには、目の前にある素材が私をしっかりと捉えている必要があったのである。

目の前の物語にこのように完全に沈潜し入り込む度合いが高まるにつれ、心からの喜びと創作意欲がうまれた。ある場面をまだ製作している最中に、しばしば早くも新たな三場面が空想の中に浮かんた。夜がやって来て鉛筆を置かなければならなくなることが残念に思われた。できれば一晩中仕事を続けていたかったからである。想像力がもたらすこの過度な緊張はそれ自体何か病的なものを有していた。疲労の時期が続き、イライラの状態が起こって、夜になるとそれが私から睡眠を奪い、しばしば昼間の活動を困難にさせた。

興奮と疲労の繰り返しは『ベヒシュタイン童話集』の仕事でも続いた。ゆたかな想像が生まれてくるときに、出版者の費用見積もりが挿絵の数を、私の頭に浮かんた作品の限度まで認めてくれない場合には残念であった。そこで私は、自分の創作意欲を満足させるためだけに、多くの着想を小さなヴィニェットやイニシャルの形に弱めた。しかしそれらは本来もっと発展させるに値するものであったし認められてしかるべきものであった。

テーターがヴァイマルからドレスデンに移り住んできたことで私には大切な親友ができた。芸術観と宗教観において私たちは互いにきわめて近いものを感じあい、また近くに一緒に住んでいたこともあって、妻たち子供たちの間にも朗らかで和やかな共同生活がはじまった。そのようなわけでテーターと私との間には生涯にわたる友情が生まれた。テーターの雄弁さ、誠実さ、心の温かさは、しっかりとて誠実そうな彼の顔つきにすでにはっきり表れていた。有能な人間にして有能な芸術家である人物がとても悲惨な貧窮を脱し、気高い生と活動を獲得するにいたるさまを実際にかいま見たいと思う人は、テーター自身によって書き下ろされ『月刊誌ヴェスターマン』のH・リーゲルの論説に報告された彼の青春期の物語を読んでみるとよい。青春時代のテーターの親友は、よく似た境遇から輩出したエルンスト・リーチェルであった。

すでに述べた人々の大方は、毎晩あるコーヒーハウスで出くわしたが、そこにはペッシェル、エーメ、オットー・ヴァーグナーや私も常日頃から出かけていった。この偶然の出会いから有志の会ができあがり、飲食店を借りて週に一度の定期的な集会在催され、約二十年間にわたって毎冬、交友があたためられた。

この会ができた最初の数年間には、毎月「作品の夕べ」が定められており、そのときは参加者の誰もが作品を一点持参しなければならず、それにたいして全員から多岐にわたる批評がくだされた。ヴィーガンツ社から刊行された『乳母の時計』や、ライニクのテキストの付いた『ドレスデン芸術家によるアルファベット入門書』が出来上がったのはこの夕べの会のおかげである。挿絵を付けなければならない素材は各人に籤で割り当てられた。『乳母の時計』については詩句が、『ドレスデン芸術家によるアルファベット入門書』の場合にはアルファベットの文字が振り分けられた。

この頃、王宮のフレスコ画を依頼されていたベンデマンは、その原案を私たちのサークルに持ってきた。同様に他の者たちも試作の図案を閲覧に供した。そのようにして下絵は実行前に厳しい検閲を通過しなければならなかった。こうした社交の夕べの数々が、晴朗で多面的な、刺激的で実り豊かな共生を与えてくれた。ベンデマンがデュッセルドルフに、テーターがミュンヘンに招聘され、またリーチェル、ライニク、オットー・ヴァーグナー、プリュッデマンらが亡くなったことで、多年にわたり存続したこの集會も自然に消滅した。

あの当時おこなわれた社交グループにもうひとつ、いわゆる月曜会と呼ばれるものがあった。その会には、たとえばアウエルバッハ、グツコウ、クラウド・グロートといった有能な文人や芸術家が参加していた。なかでもベルトルト・アウエルバッハとは親しく交際した。なぜなら私たちは、民衆生活を題材にした点で芸術的な接点を見いだしたからであった。

ふたたび先へと急ぎすぎた。家庭での出来事に話題を戻そう。

1840年から私はファルケンシュラク郊外の素晴らしい場所にある四阿に住んだ。六月になると庭にはバラが輝くように咲き乱れた。この静かな四阿からは、庭の生け垣からすぐにはじまる穀物畑と桜並木を越え

て、何にも邪魔されずにプラウエンの丘が一望できた。

今は蒸気に酔った新時代が、あの頃の静かな穀物畑の中にレールや街道をこしらえ、そこには機関車のけたたしい汽笛や荷車のガタゴトという騒音が響きわたっている。私たち家族の者たちは昔の時代と同様に静かで平穏であった。私たちの上の階には、退職した宮廷音楽家でフルート奏者のフルステナウが住んでいた。彼はその牧歌的な楽器の名人として有名で、カール・マリーア・フォン・ヴェーバーの旧友として尊敬され愛されていた。また階下には、新設の工業学校校長ゼーベック教授が妻と義妹とともに住んでいた。その義妹と私の妻の間にはすぐに親密な交友関係が生まれた。彼女はオッパーマンの娘で、のちに私の友人エルンスト・リーチェルの夫人となった。

引き移ってからの数年間、この田舎家の花咲く庭を娘のマリーが蒼白い表情で散策した。娘は風邪がもとで不治の肺病に罹っていた。

時として人生には、何という矛盾が背中合わせにふれあい、まざりあうのだろう。創作が実り豊かなこの時期、私たち家族の心は深く静かな悲しみにおおわれていた。愛するマリーに快復の希望がないことを、私と妻は医師から聞かされていた。今でもまだ生き生きとその姿が心に浮かぶ。四阿の中に腰かけていた私は、か細い姿のマリーがゆっくりと行き来する様子を眺めている。すると、唇も動かぬまま「私がもうすぐ逝くことを、ひょっとしてお父さまはご存じかしら」とでも問うように、彼女の眼差しが私に向かう。マリーの足もとには、笑いかけるようにチューリップの花が揺れていて、緑の庭の塀沿いに赤や白のバラが咲き乱れていた。

まもなくして、マリーはもはや自分の部屋から出ることができなくなった。

ある時私は、開いた窓辺にマリーの姿を見た。彼女は夏の夕べの暖かい空気と、庭から立ちのぼるバラの甘い匂いを吸いこんでいた。彼女は物思いに耽っていた。そしてその時はじめて、死が間近に迫っているという、今まで語られることのなかった秘密が明かされた。私たちの心には不安と重苦しさがのしかかった。マリーは私の前で心中を明かした。おずおずと私を見上げながら、すべての過ちと罪が赦されると確信しても、安らかな気持ちでいてよいのでしょうかと彼女は訊ねた。私は彼女に、古いアグヌス・デイの讃歌を思い起こさせた。「すべての罪を主は担いしなり。さもなくば我ら勇気を失うは必定なり。主よ、我らを憐れみ給え。」主の御言葉。「我は復活なり、生命なり。我を信ずる者は、死ぬとも生きん。」それから私たちはその他にも似たようなことを互いに落ち着いて話し合った。それは彼女の心を至福の喜びで満たした。うっとりとして両腕を広げながらマリーは叫んだ。「ああ神よ、私はとても嬉しく幸せです。もうじき救い主に会えるのですもの。」そのとき彼女の目は、もはやこの世のものとは思われない素晴らしい光の中で輝いた。

驚きと感嘆をもって私は彼女を眺めた。なぜなら、その様子があの子の幼い頃を思い出させたからであった。二歳の頃、私の膝の上で揺すられながら、あの子はときおり急に大きな歓声をあげ、両の眼をいつになく輝かせた。友人ペッシェルはその様子をいつもうっとりとして眺めていたものだ。しかし今はダンテの次のような箇所思いいたる。「目をひらきて我が美しき姿を見よ、汝諸々のものを眺め、はやわが微笑に堪ふるにいたりたればなり。」

私たちはビルニッツ通りの住まいに引っ越した。そしてそこで、1847年4月、まだ若い娘の死期が近づいた。十八歳であった。

最期の夜が訪れた。マリーは、苦しい戦いをもう一つ、それも最後の戦いを乗り越えなければならなかった。不安は徐々に高まり、彼女を襲った。部屋を出たがったマリーは、別の部屋のベッドに運んでほしいと私たちに懇願した。彼女の肉体から離れようとする魂が、瀕死の肉体ともっとも激しい戦いを交えているようにみえた。身悶えしながら彼女は、「助けて、ああ、助けてちょうだい！」と懇願の悲鳴をあげた。父であり母である私たちは、その場に座ったまま、彼女を助けてやることができなかった。その時間がなんと永く、重苦しく感じられたことか。「ああ、助けて！」悲痛な叫びが繰り返し響いた。涙する私たちに残されたことといえば、ただ天に向かって何百回と祈りの言葉を捧げることだけであった。「おお主よ、助け給え。それができるのは主御身だけです。この子の不安な魂を御身に捧げます！」

真夜中を過ぎた頃であつたろう。それまでになく苦しそうな悲鳴がふたたびあがつた。「お父さま、お母さま、もう堪えきれないの。どうか助けてちょうだい！」その時、ふと母親がベッドに近寄り、頭の下から羽枕をひとつ引き抜いた。それまで半ば座った恰好に近かったマリーの頭が深く枕に沈みこんだ。すぐさま荒い息がおさまリ、胸の鼓動も落ち着いた。静かになったマリーは、まるでぐっすり眠っている人のように横たわっていた。声もなく私たちはその場に座っていた。私の目は、静かに脈打つ首に注がれていた。やがて、次第に脈が途切れはじめた。——徐々にゆっくり——ひとつ、そしてもうひとつ——そして途切れた。——あの子は逝った。私たちはベッドの脇に跪き、涙にくれながら、あの世への祈りをこめ、解き放たれた魂を見送った。

〈註〉

『回想』の初出は Heinrich Richter 編の1885年版であるが、編者による語句の取り消し、表現の変更などが認められるため、拙訳に際しては、リヒター自身の原稿に準拠した Lehr, Fleischhack, Wagner 編の各テキストを主として使用した。しかし、Heinrich ならびに Avenarius 編纂のテキストも随時参考にしたことを附記しておく。

Ludwig Richter, *Lebenserinnerungen eines deutschen Malers. Selbstbiographie nebst Tagebuchniederschriften und Briefen von Ludwig Richter*. Herausgegeben von Heinrich Richter. Verlag von Johannes Alt Frankfurt am Main, 1885.

Ludwig Richter, *Lebenserinnerungen eines deutschen Malers*. Selbstbiographie nebst Tagebuchniederschriften und Briefen von Ludwig Richter. Herausgegeben und ergänzt von Heinrich Richter. Mit einer Einleitung von Ferdinand Avenarius. Neue reich illustrierte Ausgabe. Hesse & Becker Verlag Leipzig. 1909.

Ludwig Richter, *Lebenserinnerungen eines deutschen Malers*. Mit vielen Holzschnitten. Einhornverlag Dachau bei München, o.J. (ca. 1922).

Lebenserinnerungen eines deutschen Malers von Ludwig Richter. Herausgegeben von Max Lehrs. Propyläen Verlag Berlin, o.J. (ca. 1922).

Ludwig Richter, *Lebenserinnerungen eines deutschen Malers. Nebst Tagebuchaufzeichnungen und Briefen*. Mit Anmerkungen. herausgegeben von Erich Marx. Dieterich'sche Verlagsbuchhandlung Leipzig, 1950.

Ludwig Richter, *Lebenserinnerungen eines deutschen Malers*. Ausgewählt und herausgegeben von Marianne Fleischhack. Christliche Verlagsanstalt Konstanz, o.J. (1955).

Ludwig Richter, *Lebenserinnerungen eines deutschen Malers*. Herausgegeben von K. Wagner, Evangelische Verlagsanstalt Berlin, 1982.